

となりにいるよ

2023.09

Vol.38

「子育て」は「親育ち」

理事長 那須野 康成

私は、長年、不登校・ひきこもりの親支援を行っています。

その中でこのような話題が上がりました、「いつから親は親になるのでしょうか」子どもが生まれる前から親になる練習はありません。

子育ては子どもが生まれた時から始まります。子どもが1歳になれば親も子育てで1歳、3歳なら親も3歳で、子育てしながら親も育つのです。

親支援は、月一回日曜日の午前中に不登校・ひきこもりの親同士の交流会を行っています。子どもさんの年齢は、小学校低学年から成人まで幅広い年齢層ですが、親としての子育ての悩みに終わりはありません。交流会に初めて来られたお母さんの多くが自分の子育てで悩み涙を流されます。

そして、「自分の子育てが間違っていたのではないか、これから、今から、どのように子育てをしていったらいいのか」と投げかけてきます。皆さんならどのように考えますか？

ある不登校児の母親が語った子どもへの思いをお話します。お子さんは、小学校2年生から不登校になりました。当時は嫌がる子どもを無理やり車に乗せ登校させた結果、小3から中3まで完全に不登校になりました。当時、母自身なぜ登校できないのか子どもの気持ちや全く理解できなかったと言います

しかし、子どもは週末は少年野球にのみ通いました。チームの監督が子どもの事情を知り、自信が持てるようにと小3、4はピッチャーを、小6ではキャッチャーをやり、本人も少しずつ自信が付いていったそうです。中学校3年間は、昼夜逆転のゲーム三昧で、母親はこの暗黒から抜け出せるか不安でつらかったそうです。母親の気持ちの変化や子育ての方法は、親支援で出会った親同士の交流会で同じ思いでいることや、悩みに共感してもらえたことで気持ちも楽になり、子どもへの関わり方も変わっていったそうです。結局7年間子どもは引きこもりでしたが、今は元気に働いているそうです。

母自身、苦しくつらい時もあったが、子どもに親のあり方、育て方を学ばされ、母自身成長したことに今は感謝しているとのことでした。

子育ては、楽しいこともあれば心配すること多いと思いますが、「子育て」は「親育ち」でもあるのではないのでしょうか。

児童養護施設

ゆうりん



地域小規模児童養護施設

かえで けやき あおい ゆう

誰もが誰か、どこか
拠り所を必要としている

ゆうりん施設長 小尾 康友



会が虐待の実態を拾えなかったただけなの
に。

そのような成人を過ぎたケースの相談を、地域で居場所事業を実施しているNPO法人より受けます。その際に、安全に眠れる場所がない方に対しては、ゆうりんが借りているアパートで暮らしながら、生活を整えることを促します。この支援ができたのは、本人が「どうなってもいい」ではなくて、「助けてほしい」とNPO法人の信頼できる大人に発信ができたからです。

私たちは、頼られないと支援ができません。

そのために、ゆうりんの地域への取り組みが、いつか18歳を越える今の子どもたちや、いつか親になる今の子どもたちの暮らしにあり続けることで、困ったときの拠り所にしてくれたらと思います。

現在、こども家庭庁が発足されて「子どもまんな社会」を掲げて、社会の宝である全ての子どもを社会で育てていく方針となっています。ゆうりんも含めた地域で親子を支える取り組みが、そんな社会に繋がればと思っています。

私たちが子どもの支援をするときに一番困ることは、「自分なんてどうなってもいい。これ以上関わらなくてくれ。」と言われることです。

児童福祉法で守られる18歳以下の子どもたちには、公的に支援が出来るために、そのように言われても関わり続けることができます。しかし、18歳以上になると本人の意向がほぼ全てで、「関わらないで」と言われたら、それ以上は支援できずに、「何か困ったことがあったら相談してね」と返すしかありません。

例えば、18歳以降に、恒常的に虐待体験を受けていたと本人が気づくことや、その関わりにより対人恐怖があり、社会適応が困難なケースがあります。しかし、18歳以降に利用できる公的な支援は限られています。社会はその責任を本人に投げかけていると言えます。ただ、社





食育と聞き、頭に浮かぶことはどのような
ことがありますか？
ほだかの食育の取り組みのひとつに「ユ
ニット調理」があります。普段は、管理棟にあ
る厨房で子どもたちのごはんを作ってもらっ
ていますが、毎日のユニットのキッチンでも

子どもの傍でごはん作り

ほだか 浅井 祐哉



乳児院

ほだか



味噌汁づくり、昼食づくり、おやつ作りと手
軽にできるものを調理しています。
職員が子どもたちのために献立を考えて
食事を作る場合は、事前に調理をする職員が
献立を考え、栄養士とユニットリーダーから
アドバイスをもらい、ユニットで調理を行
います。調味料に添加物が入っている場合は、
手作りで調味料を作っています。
子ども達の好みが分かっている職員が作
るので、子どもたちも食事をより楽しく食
べることが出来ます。
調理では子どもと一緒にキッチンに立ち、
食材がどのように調理されるか形が変わっ
ていく様子を一緒に見たり、実際に皮をむい
たり、子どもが「やりたい！」と言えば簡単
なお手伝いもしてもらいます。食材のかた
ちが変わり、味が変化するなかでのつまみ食
いも楽しみのひとつです。
一緒に調理し、どんな味に変わったかを体
験することで、苦手な食べ物でも口に運ぶ
ようになる子もいますよ。



おままごと遊びで玉子をシンクの角に当てて割ろうとしたり、
電子レンジから取り出すときに「あちち」と言ったり、実際に
教えたわけでもなく、職員が食事を作っている姿をそばで見る
機会が増えたことで遊びが発展するようになりました。



家庭と同じ環境で食体験ができるよう、スーパーで食材に触れ、
形や匂い、触ったときの感覚など、その場でしか分からないこと
も体験します。「イベント」ではなく、普段の生活の一部として
日常の中で食育を行なっています。

ふれあいセンターおあだか



この夏は気温が高い日が続きました。そんな中、プールに入るのを楽しみに、沢山の方が通って来て下さいました。今年は、プールも思う存分楽しんだ夏になったと思います。

5月より予約電話を廃止してからは、「いつでも だれでも」利用できるようになり、「電話予約がなくなつてストレスが解消されました。」という声が一番多かったように思います。長期に渡つてご不便をおかけしてきた事と思いますが、現在は、大きな混乱もなく利用していただいております。

マスクが取り外され初めて見る素顔に、子ども達は職員の顔をじっと眺めていた

り、表情を見て話してくれるなど、コロナ発症から3年経ち、ようやくしつかりと向き合う事ができるようになったように感じています。

4月以降、ふれあいセンターの様子を見ていると、育児休暇を取得した父親の利用が増えてきています。

最初は、父親と母親、子どもの3人で利用されたご家族が、2回目からは父親と子どもの2人で利用されることもあります。また、毎日子育てをしている母親に、「体を休める時間を作つてあげたい」と言つて土曜日に利用する親子の姿もあります。

子育てで疲れている時、少し話を聞いてもらいたい時、誰かとおしゃべりをしたい時、ふれあいセンターでは、いつでもお手伝いさせていただきますよ。



きょうわ



去る8月下旬、きょうわでは流しそうめんと花火大会を開催しました。とある入所児の強い要望から開催されましたが、おかげさまで夏の風物詩を味わうひと時となりました。全長4mにもなるそうめん台を子ども・職員で協力して組み立てザル類もセツト、そうめんやうどん、フルーツを流しました。暗くなれば花火を出して、すすき花火やスパーク花火の色合いを鑑賞したり、子ども同士で線香花火の燃焼時間を競つたりと思いいに楽しむ姿を見ることができました。

子どもたちは定時制高校に通っている子、夜までアルバイトに励んでいる子など生活時間が各々バラバラです。新しいアルバイトを始めたばかりで疲れてしまい、帰宅後はすぐに寝てしまう子もいます。そんな中でもそうめん・花火大会開催の声をかけるとすぐに参加を決めて庭まで来てくれる子どもたちに職員一同嬉しい思いでいっぱいとなりました。

きょうわに入所する子は、早ければ1、2年で自立となり退所していきます。短い時間の中できょうわに来て楽しかったと感じてもらえるように、できる限り子どもたちの要望に応えていきたいと思っています。



子ども食堂

もりカフェ



ゆうりんは、子どもたちが共に暮らす大高町の親子にとって、「となりにいる」存在となれたらと思います。親子が離れ離れで暮らすのではなく、親子を地域で支えながら暮らす社会を理想に掲げています。

その一つとして、毎週木曜日に森の里団地の東集会所で、子ども食堂「もりカフェ」をはじめました。毎週90名以上の親子に食べに来ていただいています。笑顔で「おいしい!」と食べる地域の親子にとって、子育てで悩んだ時、困難な時に、いつかゆうりに相談しようと、拠り所になれたらと思います。

子どもは無料なので、みなさん気軽に食べに来てくださいね。



里親家庭支援センター

ほだかの里



ほだかの里では、この夏休みに有鄰学院山小屋あおむしで「子どもキャンプ」を行いました。

里親家庭で生活する子どもたちが、親元を離れ、自然の中で楽しむ経験を通して、子ども同士の繋がりや絆を作る機会を作ることができればとの思いから企画したものです。

川遊び、魚釣り、BBQをはじめ、あおむしの建物の中でのかくれんぼやUNO等、子どもたちは大いに楽しむことができました。

殆どの子どもたちから、「参加して良かった! また来年も来る!」と言ってもらえた事がとても嬉しかったですね。

厨房



今年コロナの感染も落ち着き、毎年恒例の行事だった流しそうめんを、数年ぶりに行うことができました。

ほだかの子どもたちは初めての経験となる子が多かったためか、そうめんやミニトマトが流れてくることに最初は不思議そうな顔をしていましたが、慣れてくると一生懸命つかもうとする姿があり、ニコニコと楽しんでいる様子が大変微笑ましく感じました。自分でつかめない子は、職員や大きい子に手伝ってもらい、冷たいそうめんを美味しく口に食べておりました。

大きくなったら、ゆうりんやほだかに居た時のことは忘れてしまいかもしれませんが、日々の食事提供だけでなく、「食」が身近となり楽しい経験として思い出に残るような機会を、今後も作っていききたいと思います。



ゆうりんの子からゆうりん職員になって…

施設名が「ゆうりん」に変わる前の大舎の頃から中央有鄰学院で育ち、今年4月に新卒職員として就職した永田太一さんと西村唯那さんのお二人から、職員になって感じたことや子どもの頃に感じたことなど様々な話を聞いてみました。



中央有鄰学院に就職しようと思ったきっかけを教えてくださいませんか？

永田 特に夢ややりたいこともなく、福祉のバイトを色々やりながら進路を模索しているなか、ふらつとゆうりんに寄った際に、施設長から「今ちようど人が足りないから宿直だけでもやってみないか？」と声をかけられたのがきっかけですね。はじめからゆうりんで働こうと思っていたわけじゃないんです。宿直のバイトをつづけていくなかで、「中央有鄰学院の職員になれば、卒院生と今いる子どもたちと職員との橋渡しのような存在になれるんじゃないか？」と考えるようになりました。職員さんからの後押しもありましたし、「自分の強みを活かせるのはここなんじゃないか？」って考えて就職を決めた感じです。

西村 自分が施設にいた時の担当職員さんがとても素敵で、その職員さんみたいになれたらいいなとずっと憧れていたもので、それが一番のきっかけです。

幼稚園や保育園も視野には入れていましたが一人ひとりと関わる時間が圧倒的に短くて…。子どもた

ちと長く繋がっていきけるのはやっぱり施設なのかなって。他の児童養護施設にも行ってみたんですけど、元施設児童ということで必要以上に気を遣われて、しんどくなってしまうようなことがありました。ゆうりんでは、前向きに後押ししてくれる職員さんもいて、自分の強みをいかせるんじゃないかと考えて、中央有鄰学院に就職することになりました。ただ、前向きな後押しが逆にプレッシャーになることもあるんですけどね（笑）

職員になって初めてわかったことは？

永田 子どもの頃は、「子どもが学校や幼稚園に行ったら後は、職員って何してるんだろう？」ってなんとなく思っていましたけど、想像していた以上に事務量が多くてびっくりしました。

それから、部会や委員会や会議、日々の生活を含めて見えないところでも、常に子どもたちがどうしたら安全に楽しく暮らしていけるかを考えてくれていたんだと分かりました。これは、子どもの頃にはわからなかったですね。

西村 私も事務量の多さに驚いています。それから、当時の職員さんが、実は、休憩時間や自分の時

間を削って向き合ってくれていたということが、職員になって初めてわかりました。改めてすごく嬉しく思えたところです。

永田 それは、僕もすごく感じていますね。当時の職員さんたちは、勤務時間とか関係なく向き合ってくれていたんだって。

職員になって苦労しているところはありますか？

永田 実はまだそんなに苦労してないんですよ。所属の部屋に小さい子がそんなにいないのでそれほど体力を使うわけでもないですね。それに一年目なので、責任のある難しい役割を任されるわけではないので。

ただ、どうしたら伝わるかなとか、これは子ども



ものために言ったほうがいいのかとか、ヘルプとサポートの部分で迷うところは多々あります。

西村 私もまだそんなに苦労してないです。逆に困るようなことがなさすぎて困っているというか…。先輩職員もとても優しくて良くしてくれるので恵まれているなと思っています。昔に比べて職員数も多くなっただけなのかもしれないです。

以前は、ただでさえ少ない職員だったのに、その職員が「突然いなくなる」みたいなこともありましてね（苦笑）

永田 それ、ありましたね。今年は、同期で何人か入りましたけど、そういう兆候の職員は今のところいないと思います（笑）

仕事でやりがいを感じていることやこれからやりたいこと と思っていることはどんなことですか？

永田 やりがいは、子どもたちのいろいろな時間や景色、感情を共有して一つひとつの成長を感じられるところかなと思います。こういった経験は児童養護施設のように24時間子どもと関われる仕事ならではなのかなと思います。

それから、子どもが個々にやりたいと思っていることを叶えられるような力添えができるというかなと思います。どんな小さな些細なこと



でも、それを叶えていくことを繰り返していつて、毎日を楽ししく過ごせて、自分の人生に自信と希望を持てるようになって欲しいと思っています。施設で育った

とか関係なく思えるくらいに…。ただそれだけじゃなくて、やっぱり施設を出る時に、ちゃんと送り出したいという想いもあるので、責任をもって子どもの自立を支えていきたいというのがこれからの目標ですね。



西村 まだ働き始めて間もないので、

「やりがい」というのが何なのかわからない部分もあるんですけど、子どもたちから「昔の施設はどうだったの？」「どんな

子だったの？何で施設で生活してたの？」と聞かれた時に実体験として話せるので、そういったことを通して子どもたちと信頼関係を持てるようになっていくことを、とても嬉しく感じています。自分たちがいかに守られているかとか、施設にしていることを肯定的に伝えることができるのは、当事者としての強みかなと思いますね。

自分たちが子どもだった頃の施設と今の施設を比べて何か感じるところはありますか？

永田 今は、家庭的な環境で少人数のグループで育つことがいいてとされて、本園を離れて地域のそれぞれの家（地域小規模児童養護施設）に住むようになっていきますけど、それがいいことばかりとは思えないんですね。

自分たちが子どもの頃は、外に出ればいつでも誰かいて、サッカーをやったり、ドッチボールをしたり、すぐにみんなで遊ぶことができました。

それが施設の良さでもあると思うんです。でも本園からどんな地域に引っ越しをしていくことで、そうやって気軽に皆と遊ぶことも難しくなつたと思います。卒院生によつては、ゆうりんに来てても自分の帰る家がなくなっていると感じている子もいます。もちろん職員として、地域小規模施設の良さもわかっているんですけどね。

西村 昔は、施設対抗のソフトボールや野球の大会があつて、半ば強制的に参加しないといけないような感じで、練習も大変だったんですけど、今思い返せばそれがとてもいい思い出になっていますし、大変なことでも乗り越えることができるきっかけのひとつになつていような気がするんです。今は、そういった「みんなで何かをする」というものがなくて、なんか物足りない感じがしちゃいますね。

お二人は互いにどういう存在ですか？

永田 幼い時から施設で一緒についてただけじゃなくて、幼稚園、小学校、中学、高校、大学、そして就職先も一緒なので、適切な言い方がわからないですけど「空気」みたいな感じですよ（笑）特別な存在ではなく、当たり前のようにいる存在というか。

西村 私もおなじ感じですよ（笑）それに二人の特別なエピソードがあるわけでもないというか…。

なんか今回は、苦労話とか挫折感を感じるような話ができなかつたので、また職員として苦労や挫折を味わった後にもう一回こういった対談したいですね。



勘定科目		法人本部	ゆうりん	ほだか	きょうわ	ヘルパーS	収益事業	合計
事業活動による収支	収入							
	介護保険事業収入	0	0	0	0	11,200,706	0	11,200,706
	児童福祉事業収入	0	429,614,558	246,043,255	47,575,804	0	0	723,233,617
	借入金利息補助金収入	0	456,009	196,367	0	0	0	652,376
	経常経費寄付金収入	5,197,549	2,627,283	984,912	66,253	0	0	8,875,997
	受取利息配当金収入	400	186	1,820	86	73	80	2,645
	その他の収入	96,250	7,094,571	8,305,179	737,743	0	0	16,233,743
支出	生活事業収入	0	0	0	0	0	1,324,795	1,324,795
	事業活動収入計	5,294,199	439,792,607	255,531,533	48,379,886	11,200,779	1,324,875	761,523,879
	人件費支出	6,631,023	293,257,167	201,338,380	31,734,802	14,618,270	723,802	548,303,444
	事業費支出	1,230,000	60,982,207	13,951,270	8,388,758	0	0	84,552,235
	事務費支出	1,099,232	34,379,143	14,611,374	4,731,183	1,567,449	640,651	57,029,032
	支払利息支出	127,627	570,120	233,053	0	0	0	930,800
	その他の支出	0	0	0	0	0	0	0
施設整備等による収支	事業活動支出計	9,087,882	389,188,637	230,134,077	44,854,743	16,185,719	1,364,453	690,815,511
	施設整備等補助金収入	▲ 3,793,683	50,603,970	25,397,456	3,525,143	▲ 4,984,940	▲ 39,578	70,708,368
	施設整備等寄付金収入	0	6,700,800	1,865,600	0	0	0	8,566,400
	設備資金借入金収入	0	0	0	0	0	0	0
	固定資産売却収入	0	0	0	0	0	0	0
	施設設備等収入計	301,000	57,304,770	25,397,456	3,525,143	▲ 4,984,940	▲ 39,578	70,708,368
	設備資金借入金元金償還支出	1,092,000	8,376,000	2,332,000	0	0	0	11,800,000
その他の活動による収支	固定資産取得支出	0	57,368,214	3,152,136	0	0	0	60,520,350
	固定資産除却・廃棄支出	0	0	0	0	0	0	0
	ファイナンスリース債務の返済支出	0	0	0	0	0	0	0
	その他の施設整備等による支出	0	0	0	0	0	0	0
	施設整備等支出計	1,092,000	65,744,214	5,484,136	0	0	0	72,320,350
	施設整備等資金収支差額	▲ 791,000	▲ 59,043,414	▲ 3,618,536	0	0	0	▲ 63,452,950
	長期運営資金借入金元金償還寄付金収入	0	0	0	0	0	0	0
その他の活動による収支	積立資産取崩収入	0	1,818,150	911,400	0	0	0	2,729,550
	拠点区分間繰入金収入	5,410,556	0	0	0	0	0	5,410,556
	その他の活動による収入	0	0	0	0	0	0	0
	その他の活動収入計	5,410,556	1,818,150	911,400	0	0	0	8,140,106
	長期運営資金借入金元金償還支出	0	0	0	0	0	0	0
	積立資産支出	0	0	19,000,000	0	0	0	19,000,000
	拠点区分間繰入金支出	0	3,500,948	1,909,608	0	0	0	5,410,556
その他の活動による収支	その他の活動による支出	0	0	0	0	0	0	0
	その他の活動支出計	0	3,500,948	20,909,608	0	0	0	24,410,556
	その他の活動資金収支差額	5,410,556	▲ 1,682,798	▲ 19,998,208	0	0	0	▲ 16,270,450
	当期資金収支差額合計	825,673	▲ 10,122,242	1,780,712	3,525,143	▲ 4,984,940	▲ 39,578	▲ 9,015,032
	前期末支払資金残高	24,425,822	68,431,260	51,542,679	8,700,347	7,960,864	9,498,045	170,559,017
	当期末支払資金残高	25,251,695	58,309,018	53,323,391	12,225,490	2,975,924	9,458,467	161,543,985

「支援ありがとうございました」

令和5年4月1日から令和5年8月31日までに、寄付・寄贈・招待・ボランティア活動にご協力いただきました方々のご紹介をさせていただきます。紙面の都合上内容は省略させていただきます。（順不同・敬称略）

【個人】

福岡俊郎 矢守信昭 小田義信 柴田周平
石井祐治 佐々木佳代子 松永勲 鈴木勝
久野章雄 森政樹 谷川修 土居万里子
倉知清和 今南順子 三治史奈 久野すみ子
加藤幸男 谷本美枝子 山ロミッソ 松山信
小椋寿男 深谷まみ 杓名章 水野恭宏
佐藤孝介 不破寛恵 三浦修一 小港朋未
春田琢磨 早川富雄 牛田智子 崎山智子
ひとみしゅう 阪野聡美 田中尚己 館乃雲
山口祐司 飯田 林千愛 杉山かをり
吉岡菜緒子 丹羽博久 加藤和世 古泉桂
山田佐智子 片岡志保 清水恵子 余語宗紀
吉川志保 志賀教夫 加藤隆子 瀬川卓也

【団体】

ジャパンフォレスト 豊明損保センター
大高学区民生委員児童委員協議会
名古屋名南ロータリークラブ 名古屋食糧
オーランドケー エッチアイ技研 かけはし
KADOKAWA MID 事業推進室・事業管理部
タキヒョー 豊島 The Music Restaurant
中部トールハン会 東海アイスクリーム協会
ヒルズウォーク徳重ガーデン店 KEIZ 大高店
チュチュアンナ1%クラブ 安堂商會
コカ・コーラボトルラズジャパン 尾州商會
オサムファーム エイデンアンドアネイ
文創 親切会中部支部 チーカス イトウ
ワイドグループ ワイドワン ユウシン
ユージーエント バンクフオースマイルズ

近藤雅裕 佐古実加 金田和久 荒木まどか
村瀬光行 中尾梨絵 佐々木紳多 杉戸葉央
山田佳世乃 一杉治夫 山本陽子 中上純二
柴橋佳幸 伊藤吟子 山見由紀子 杉山真優
鷲頭美聖 藤田真利 金子亜佐美 小堀紀
稲垣理温 藤本義岩 竹田登志也 梶野弘

◆寄付里親は、こちらのQRコードから登録できます。
「協力お願いします。」



南生協病院居宅介護事業所 山銀ぶどう園
フアーストリテイリングサステナビリティ部
光ネットワーク協同組合 東京足袋本舗
トヨタファイナンス パームタウン大高
まるごみ薩摩本部実行委員会 大塚商会
愛知県信用農業協同組合 ボラみみ情報局
愛知図書教材協会 アートワークス
フィリップモリスジャパン合同会社
キョーワ薬局 餃子の王将 シュリンブ
トヨタモビリティパーツ労働組合愛知支部
タキヒョー チャリティ芸能祭実行委員会
資生堂子ども財団 名古屋市 鳴海教会
名古屋市立大学 名古屋キヨニスクラブ
夢シート 名古屋市社会的養育施設協議会
グループエスカラダー 白水運輸
中部善意銀行 名古屋文化振興事業団
スマイルギフト トヨタシステムズ

COLUMN

ある人から「ポリシーを持って子どものために一生懸命尽くすことの素晴らしいこと」について話を聞きました。
私は、上手く言えませんが、言葉にならない「言い分」がありました。そして、この言葉にならない言い分が、普段子どもたちが感じる愚劣さのひとつであるように思っているんです。
例えば、「ママが大切にしていることを僕は大切に思えない」とか「先生のその一生懸命さが私には辛い！」って伝えるのって、大人にとっても難しいことなのに、子どもが上手く伝えられるわけありません。
「泣いてないで黙ってないで、ちゃんと口で言いなさい」と言われても、どんな言葉もなくなるだけです。
この言葉にならない子どもたちの「言い分」を聴く姿勢は、子どもとの関わりにおいて非常に大切なことではあります。が、周りにいる大人がいつも言い分が聴けるわけでもありません。
そもそも子どもというのは、言語化できないゆえに、大なり小なり言葉にならない言い分(苦しみ)を抱えて育っていくものだと思っています。
ただ、そんな苦しさのなかにあっても「自分は大事にされている」「愛されている」という確かな実感があれば、多くの子どもはその言い分を飲み込んで大人になっていくのだと思います。
大人になるということは、そういう側面も含んでいるんだって思っています。

